

イデックスオイルレポート ~For a week~

2022/9/16作成 株式会社新出光

【概況】<ロシア産流入減少、SPR在庫減少>・景気後退懸念<

●9日、欧州連合(EU)加盟各国のエネルギー相は、ロシア産の流入減少で高騰する価格抑制に向け、上限設定などの緊急措置を打ち出すよう欧州委員会に求めました。フォンデアライエン欧州委員長はウクライナ侵攻を続けるロシアの資金調達を阻止するため、ロシア産天然ガスに対する価格制限を検討すると表明していましたが、理事会は名指しを避け、トーンダウンさせたとの事。ロシアのプーチン大統領はEUの対応次第では、ガス・石油の供給を停止すると警告しており、地政学的対立が悪化すれば欧州がエネルギー危機に陥るとの不安は依然として強くなり相場は86.79ドルへ続伸しました。

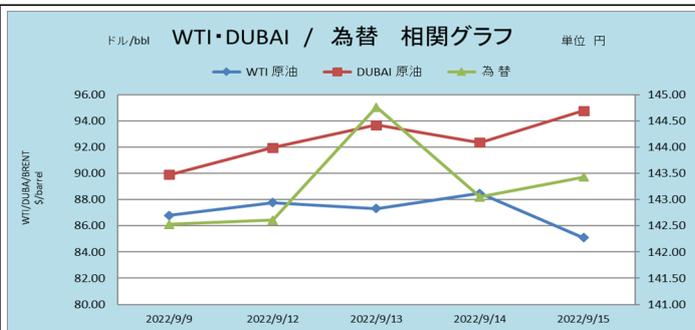
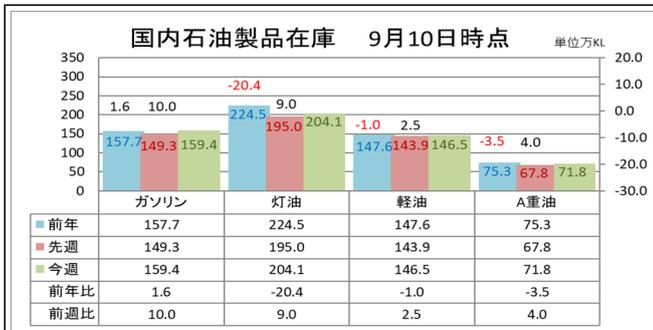
●12日、バイデン米政権が高インフレに対応するため、4月に開始した大規模な戦略石油備蓄(SPR)放出計画により、9日時点のSPR在庫は4億3410万バレルと1984年10月以来約38年ぶりの水準に縮小し、エネルギーの供給先細りに対する懸念を受けて買いが入り相場は87.78ドルへ続伸しました。

●13日、米労働省が発表した8月のCPIは前月比0.1%上昇、前年同月比でも8.3%上昇と、ともに市場予想を上回りました。これを受けて、米連邦準備制度理事会(FRB)が大幅利上げを継続するとの見方が強まり、景気減速につながるとの連想から売りが先行し相場は87.31ドルへ下落しました。

●14日、IEAは公表した石油月報で、世界景気の減速や中国経済の停滞を受けて、世界の石油需要は今年10~12月期に伸びが鈍化する予想しました。一方で、天然ガスの価格高騰を背景に北半球の冬季にガスから石油へのエネルギー源の切り替えが加速。暖房用燃料の石油需要が拡大し、今年10月から来年3月にかけて日量平均70万バレルと、前年の2倍の水準に達するとの見方を示しました。これに対して供給の伸びは依然弱いと、先行き不安が台頭し相場は88.48ドルへ反発致しました。

●15日、米鉄道大手数社と労働組合は15日早朝、労使契約の締結で暫定合意。これにより、16日午前0時01分を期限とするストライキは当面回避される見通しとなりました。約6万人の労働者を代表する同組合がストに突入すれば、国内外の食料や燃料の輸送が停滞するとして注目が集まっていた。暫定合意の報を受け、ガソリンなど石油製品先物が大きく値を崩し、原油に売りが波及し相場は85.10ドルへ下落しました。

9月16日 16:30現在 WTI原油 85.69ドル 為替 1ドル 144.11円



	次回元売変動予測	
	9/22~	元売変動予測
ガソリン	→	0.0~+0.5
灯油	→	0.0~+0.5
軽油	→	0.0~+0.5
A重油	→	0.0~+0.5
LSA	→	0.0~+0.5

※原油コスト「1.0~1.5円」
 ※激変緩和補助金「-36.6円」
 ※現時点での予測です。

【製品卸価格】<需要低迷による枠消化遅れの影響で販売競争がさらに強まる>

●今週 今週の元売り仕切り改定は、3社ともに原油コストは、「-2.5円」、補助金は、「-35.6円」、都合「-1.6円」の値下げ改定となりました。資源エネルギー庁の公表する全国レギュラーガソリンの12日時点の小売価格平均は170.1円となっております。今週は、元売月間玉と市況連動玉を持つ業者が、補助金が減額される14日までに枠を消化しようと販売を強化したため市況は、日毎に下落しました。

●9月17日以降 次回の元売り改定は、原油コストは「1.0~1.5円」の値上げ改定予測で、激変緩和補助金は「-36.6円」の見込みで、都合「±0.0~0.5円」の値上げ改定の予測となっています。9月15日の価格改定以降は、元売週間玉、元売月間玉と市況連動玉と3つ巴の販売競争となっています。9月に入り需要が低迷しており枠消化が遅れている業者は、利幅を削って販売を強化しているため日毎に市況は、悪化しています。製油所稼働率は、複数の製油所で、FCC装置等のトラブルが発生し稼働率が低下しており、さらに複数の製油所で秋の定修シーズンを迎えるものの、7~8月のようなタイト感を指摘する市場関係者は見当たらず販売競争は、激化しています。週末にかけての原油の下落により、来週的大幅な上げが回避され小幅な上げに留まりそうな見通しのため月末にかけて益々販売競争は、激化していくものと思われます。

【次世代エネルギー】< CIS系太陽電池材料で高効率な水素生成に成功:世界最高となる変換効率実現 >

国立研究開発法人 産業技術総合研究所省エネルギー研究部門 石塚 尚吾 首席研究員と甲南大学 池田 茂 教授は、太陽電池として有望なCIS系材料であるCuGaSe₂のp-n接合界面制御手法を開発し、太陽電池と水分解水素生成光電極という異なるエネルギー変換デバイスにおいて、同じCuGaSe₂を用いてそれぞれの性能を向上させることに成功しました。

この成果は、これまで主に太陽電池として用いられてきたCIS系材料が、光電気化学セルによる水分解水素生成にも有望であることを示すもので、CIS系をはじめとする多元系化合物薄膜材料を用いた、新たなエネルギー変換技術への展開が期待されます。ワイドギャップCIS系材料による太陽電池や光電気化学セルでは、高性能化が困難でしたが、今回開発した界面改質手法によって性能向上を実現しました。この研究では、2050年カーボンニュートラルの実現に向けて二酸化炭素(CO₂)の排出量削減を目指す中で、特に、太陽光発電と水素エネルギーへの関心は高く、世界中で関連技術の研究開発が行われています。近年、主流である結晶シリコン系太陽電池とは異なるさまざまな太陽電池が提案されており、中でもCIS系太陽電池は、高い光電変換効率と優れた長期信頼性などの特長で知られています。また、CIS系材料は、薄膜材料という特長を活かして、エネルギー変換デバイスの軽量化や柔軟性を持たせることも可能です。禁制帯幅の広いワイドギャップCIS系材料は、安価な次世代タンデム型太陽電池の実現を目指す上で、波長の短い青色光を吸収するトップセル材料として、特に注目されています。

「出典」

(1) https://www.aist.go.jp/aist1/press_release/pr2022/pr20220802/pr20220802.html